17.8.

1

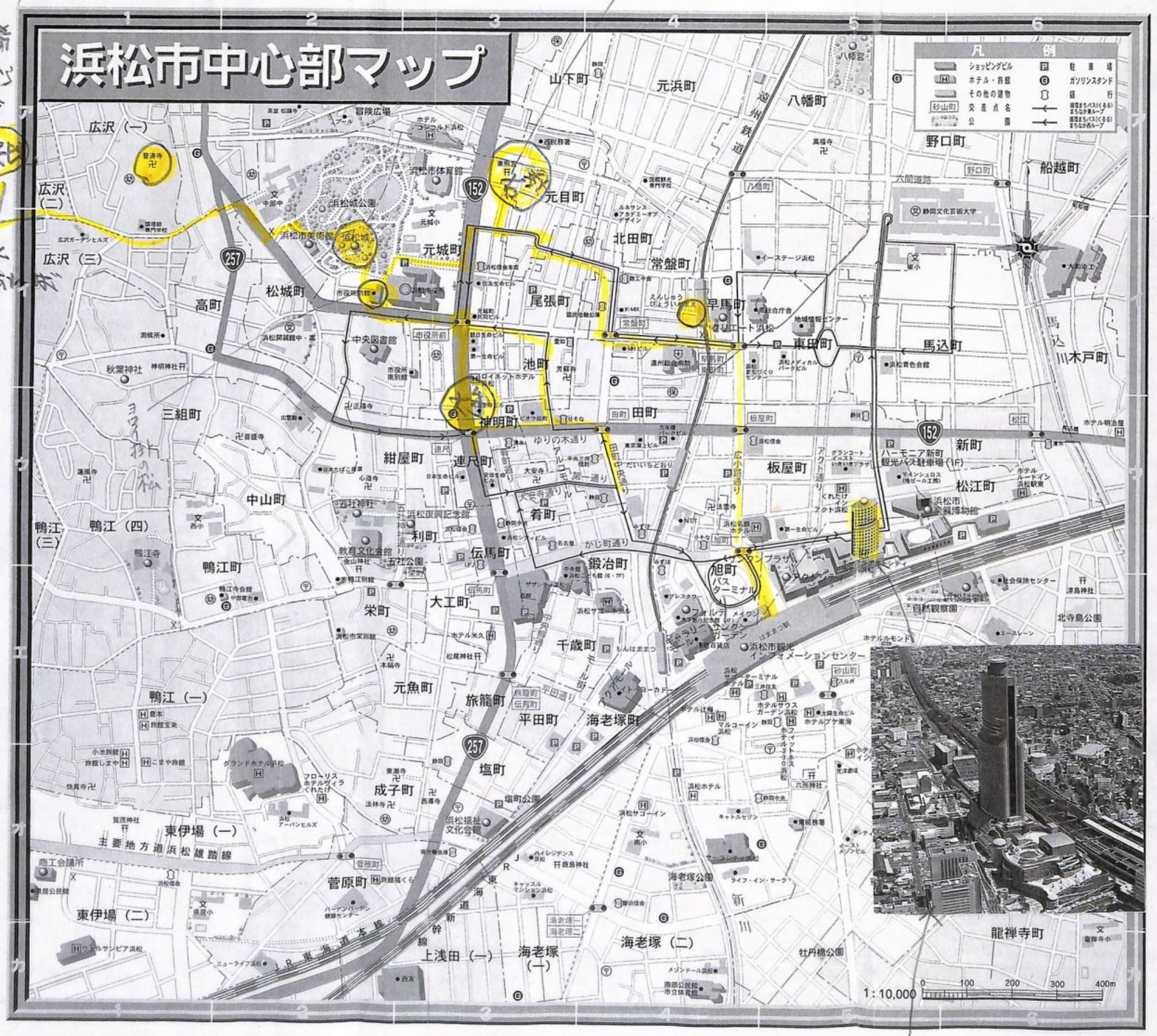
昼食

2

余備城から15分

西来院

時間と休むあれば回る

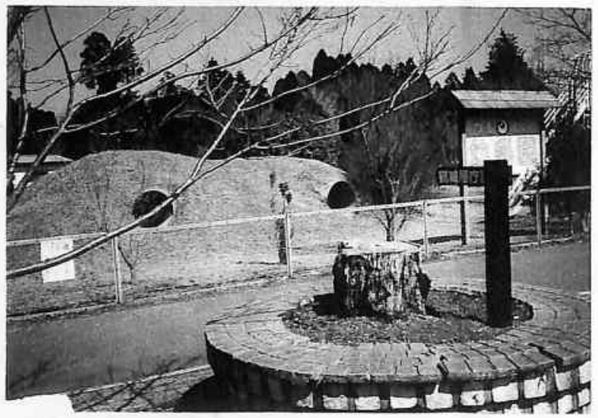

浜松市中心部マップ
凡例
ショッピングビル
ホテル・旅館
その他の建物
交差点名
公園
駐車場
ガソリンスタンド
銀行
1:10,000
0 100 200 300 400m
浜松城
浜松市美術館
浜松城公園
元城町
中央図書館
市役所前
尾張町
常盤町
早馬町
東田町
馬込町
川木戸町
八幡町
野口町
船越町
元目町
北田町
山下町
元浜町
遠州鉄道
静岡文化芸術大学
大知波工
高町
松城町
広沢（一）
広沢（二）
広沢（三）
三組町
秋葉神社
神明町
田町
紺屋町
連尺町
中山町
鴨江（四）
鴨江（三）
鴨江町
利町
教育文化会館
五社公園
伝馬町
希町
鍛冶町
板屋町
新町
松江町
浜松市楽器博物館
旭町バスターミナル
大工町
栄町
千歳町
自然観察園
北寺島公園
鴨江（一）
元魚町
旅籠町
平田町
海老塚町
塩町
成子町
東伊場（一）
主要地方道浜松雄踏線
菅原町
東伊場（二）
上浅田（一）
海老塚（一）
海老塚（二）
牡丹橋公園
龍禅寺町
新川
JR東海道本線
東海道新幹線
浜松城公園
浜松市体育館
浜松市役所
浜松駅
ホテルコンコルド浜松
ホテルロイヤルクラシック浜松
ホテルメイワン
ホテルアクティブ
ホテルルモンド
浜松市観光インフォメーションセンター
浜松ホテル
浜松サゴーイン
浜松福祉文化会館
海老塚公園
ハーモニア新町観光バス駐車場（1F）
浜松市楽器博物館
浜松科学館
浜松青色会館
浜松医科大学
浜松市立中央図書館
浜松郵便局
浜松市役所南別館
浜松市役所新別館
浜松市立中央図書館
浜松市立高等学校
浜松市立北部小学校
浜松市立東小学校
浜松市立元城小学校
浜松市立南小学校
浜松市立西小学校
浜松市立東部小学校
浜松市立北小学校
浜松市立高等学校
浜松市立北部公民館
浜松市立体育館
浜松市立図書館
浜松市立美術館
浜松市立科学館
浜松市立動物園
浜松市立植物園
浜松市立公民館
浜松市立福祉文化会館
浜松市立文化会館
浜松市立公園
浜松市立公園
浜松市立公園

3

鶴舞藩庁跡

鶴舞藩は明治元年（１８６８）、徳川家達の駿府移封に伴い遠州浜松藩６万石の譜代大名井上河内守正直の上総転封より成立しました。
井上氏は４代正岑より６万石と江戸城雁之間詰の家柄となり初代正就から１０代正直まで転封を繰り返しながら幕府の要職を歴任し、正直自身２度も老中に抜擢されています。正直は明治２年２月１１日はじめて藩領長南宿に到着し、今関方を仮本営、浄徳寺を仮庁舎とし、三月１２日には城地を求め原野桐木原の開墾に着手、翌３年４月に藩庁知事邸が完成し、藩名鶴舞藩が確定します。この間、明治２年６月の版籍奉還また明治４年７月に廃藩置県が行われ、長南での大名時代は５か月、鶴舞での藩知事時代は１５か月でした。

市原市教育委員会



知行村数

郡名	村数
市原	108
埴生	48
長柄	42
山辺	8
計	206

○戸数 13,400戸
○人口 63,900人

（小幡重康作）

主郭高台

本丸土塁

本丸水濠

桐木台に突如生まれた明治の鶴舞城（藩庁舎）

鶴舞藩は明治元年5月、徳川宗家を継承した家達の静岡藩移封にともなって浜松から井上正直が6万石で入封して成立した。井上家は秀忠の老中・正就を藩祖とする新参譜代大名で、歴代藩主が老中や京都所司代、若年寄などの幕閣を勤めた。正直も老中2期、外国御用取扱、勝手入用掛など幕末激動期の幕府中枢で活躍、戊辰戦争は藩論を恭順にまとめて無難に乗切った。9月上総への転封を命じられた正直は翌2年2月国入り、石川村桐木原に鶴舞城の建築に着手した。城は1年後の明治3年4月一応の完成を待って入城、しかしこれより早い2年6月版籍奉還が行われ正直は城主から鶴舞藩知事に変わり、4年7月廃藩置県を迎えた。

城地は2方を切立つがけに囲まれた天然の要害でからめ手の尾根を堀切り、本丸、2の丸、3の丸、複数の外曲輪（仮称）からなる。本丸には土塁、水濠を巡らせ、藩主（知事）御殿、藩庁舎を築いた。経費は新政府から3年間現米１２００石と１万８０００両が支給されたが、実績は明治2年5万１０００両と永１２２貫文、3年は3万４０００両永75貫文であった。鶴舞保育園と道路を挟んだ畑地などが本丸跡で、鶴舞小学校の本丸土塁残欠に「鶴舞城本丸跡碑」「鶴舞藩庁高札」が立つ。西側の堰は水濠で、内側の土塁とともに貴重な現存遺構といえる。また、明治16年の『迅速測図原図』付図をみると直角に水濠と土塁が小学校まで回っているがその濠跡一部もはっきりと読み取ることができる。

山野に突如生まれた城下町は城地と藩士住居、総構え城下町およそ40万坪におよぶ巨大都市で、『藩制一覧』の士族１１８８人、卒族２１３６人、廃藩置県後明治7年鶴舞村人口は６２７戸、３１２６人、千葉県第8位であった。正直は教育の振興、勧農と産業の育成に注力したが実を結ぶことなく終息。明治6年廃城、主要建物は鶴舞小学校として明治43年まで使用された。

4

井上正直

三百藩藩主人名事典

天保八年十月浜松藩主井上正春の子として生まれる。幼名英之助。弘化四年二月十二日父正春が死去の後、四月二十二日家督を継ぎ、浜松藩六万石を襲封。嘉永二年九月一日、将軍家慶に初見。のち従五位下河内守に叙任され、雁の間詰、寄合となる。同六年六月初めて封地浜松に赴く。藩政では、土地開発や殖産興業政策を推進。また海防問題が深刻化するなかで、安政三年遠州灘警備のため米津浜砲台の築造に当たる。幕政においては、同五年十月九日奏者番、文久元年三月八日寺社奉行に昇進、翌二年七月二十一日朝鮮人来聘御用を兼任し、十月九日老中となる。同月二十四日従四位下、十二月二十八日侍従に叙任。翌三年二月十二日外国御用取扱となり、横浜鎖港問題などに当たる。元治元年七月八日外国御用を解任され、同月十二日には老中を罷免され寄合となる。ついで慶応元年十一月二十六日老中に再任。将軍家茂が長州再征のため大坂に入城するさい供奉し、このとき外国御用取扱に再任される。翌二年五月六日江戸に帰府。六月十九日勝手入用掛も兼帯するが、翌三年五月両掛を解任される。戊辰戦争で十七日再び老中も罷免される。戊辰戦争では、早くから勤王証書を提出し、同四年二月二十日浜松に帰藩して、征東軍を無事通過させる。その後、浜松藩管内の治安警固を新政府より下命される。同年五月二十四日徳川家達の駿河・遠江への入封により、九月五日転封命令が下り、十月十七日上総国市原・山辺・埴生・長柄四郡内へ移封となる。十二月十五日城地を引渡し、領地替費用として米一千二百石と金一万八千両を与えられることになる。翌明治二年正月二十七日浜松を出立して、二月十一日上総埴生郡長南矢貫村に到着。ここに仮庁舎を置き、市原郡石川村桐木原の原野を開発して新藩庁舎の建設にとりかかる。同年六月十九日版籍奉還により藩知事となる。翌三年四月新藩庁舎が完成して、矢貫村より藩庁を移転し、藩名を鶴舞と称する。鶴舞藩は、上総四郡で六万二千二百石余のほか、播磨の二郡（美嚢・加東）で六千八百石余あり、実高は六万九千石余であった。藩政では養豚・林野開発・交通路の整備などの産業振興策を推進。また名主のなかから人格識見の優れた者を「敷教小助」という役に就任させて教化策を展開したり、孝行の表彰政策、種痘、貧民救済策を施行するなど、民政にも力を注いだ。さらに藩校克明館を設置して教育振興もはかっている。同四年七月十四日廃藩置県により藩知事を罷免された。正直は同十七年三月家督を譲って隠居し、同三十七年三月九日六十八歳で没する。

はじめに 市原鶴舞
井上正直6万石
居城から

浜松（はままつ）城

［所在地］　浜松市元城町
［慶応三年時の城主］
井上河内守正直
［家格］　城主
［慶応三年時石高］　六万石
［明治六年の存廃令］　廃城

浜松城模擬天守

空からみた浜松城

永禄十一年（一五六八）徳川家康が今川氏の支城引馬城を攻略し、元亀元年（一五七〇）同城を拡張、西方の三方原台地東南端の高台を本丸として築城し、岡崎城から移転。天正十四年（一五八六）駿府城へ移転した後は、菅沼定政が城代として在城。同十八年徳川氏の関東移封後、堀尾吉晴が城主となる。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦い後は桜井松平（忠頼・断絶）・水野（重仲家）・高力・大給松平（家乗家）・太田・青山（宗俊家）・本庄松平・大河内松平（信綱家）・本庄松平（二次）・井上（正就家）・水野（忠元家）の諸氏を経て、弘化三年（一八四六）以降再度井上氏在城。

城は堀尾氏の時代に修築されたと推定され、西北の最高所に略菱形の天守曲輪を置き、内部の北寄りに天守台を築き、その東に方形の本丸、二の丸を順次階段状に配し、その東南に長方形の広大な三の丸を置いた。その北側の四個の小郭がある地域は中世の引馬城の跡といわれて、古城と呼ばれた。天守曲輪と本丸の南には一段低く清水曲輪、さらに谷を隔てた丘に出丸、西方には作左曲輪（本多作左衛門の居所と伝えられる）があった。天守曲輪の東面に天守門、本丸の南面に鉄門、東面に裏門、清水曲輪の東端に南面して榎門、三の丸南面には東海道に面して大手門などの櫓門があり、ほか多数の門を開いた。天守は江戸時代にはなく、本丸に二重の菱櫓と二重の富士見櫓と太鼓（多聞）櫓、清水曲輪に二重の銭櫓、三の丸の東南隅に二重の隅櫓があった。御殿は二の丸に置かれ、古城には米蔵が置かれた。

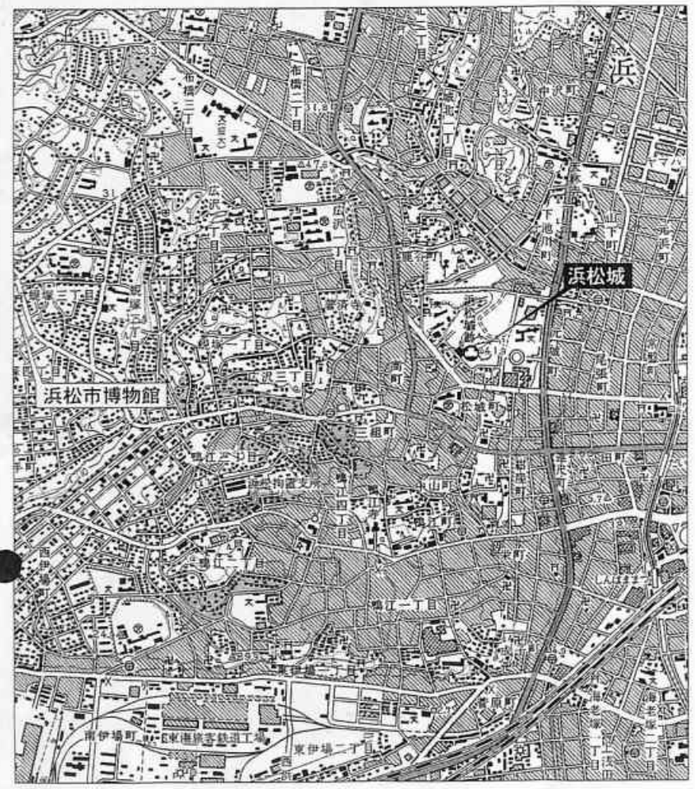
明治元年九月上総鶴舞に転封となり、以後、駿河藩領となる。翌二年正月井上八郎が浜松奉行となる。同年三月井上家から徳川家に城を引き渡す。同年八月奉行を廃して勤番組頭とする。同四年十一月浜松県が発足、翌五年同県において建物を払い下げ取り壊す。さらに同六年城の地所、立木の払い下げを布達するが、城地には貫属士族の住宅が建ち、開墾も行われていたため、その反対に会い、同七年払い下げを中止。

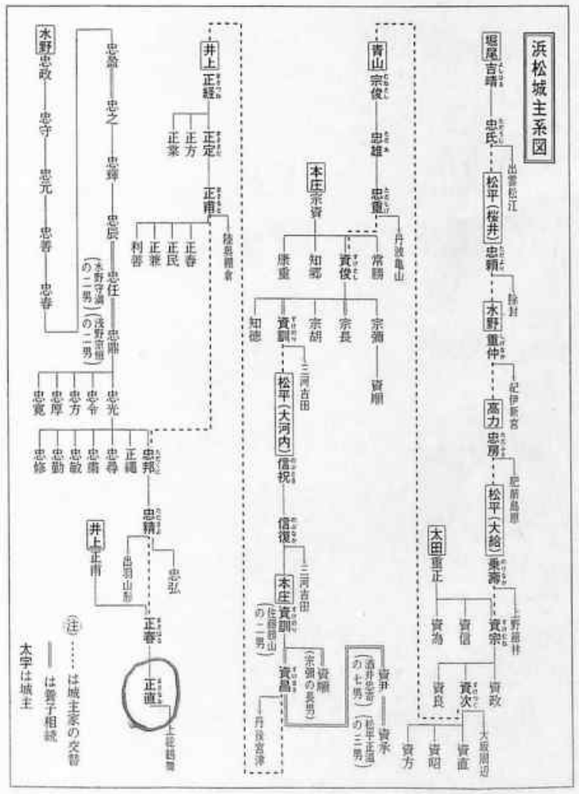
同六年五月城跡に、第二大学区第一番中学区第一番小学校の校舎を新築して移転（のち浜松尋常小学校、浜松元城尋常高等小学校、浜松市元城国民学校と各改称）。同十九年引馬古城跡に徳川家康を祀る東照宮を建立。大正三年中堀の埋め立て工事中に円頭太刀の破片、雲珠、須恵器などを発掘。昭和二十年六月十八日戦災により浜松元城国民学校、東照宮は焼失し、国民学校は廃校。同二十三年四月市立元城小学校を二の丸跡に開校。同二十五年五月城跡を浜松城公園とする。同二十七年浜松市役所を二の丸跡に移転。同三十三年四月天守を復興。同年東照宮を再建。

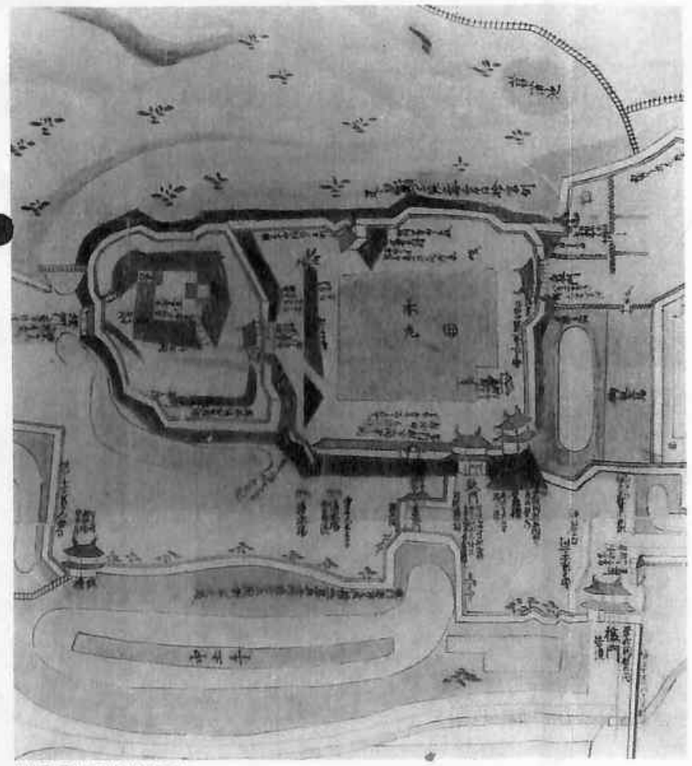
●現況

城跡は市史跡。本丸周辺は浜松城公園となり、天守台、天守曲輪の石垣、本丸の石垣の一部が現存。二の丸北部は元城小学校、南部は浜松市役所敷地、作左曲輪は作左の森、市立中部中学校敷地となり遺構はない。三の丸は国道二五七号が中央部を貫通し、浜松信用金庫本店敷地その他市街地となる。引馬古城（米蔵）跡は国道で一部が削られているが、東照宮境内や住宅地となり、東照宮境内に土塁の一部が僅かに残る。出丸は市立中央図書館敷地となり遺構なし。城の周囲の堀や空堀はすべて埋め立てられ市街化が著しいが、各所に標石や説明板が立つ。

本城は三方原の戦いの折りの徳川家康の居城であったことで名高く、江戸時代を通じて重視された。維新後三の丸は移住した旧幕臣に払い下げられて、早く市街化するなど変貌しているところが多い。現在は天守曲輪と本丸が市史跡に指定されて旧態を留めるのみで、復興天守も史実に基づくものではない。昭和三十五年以降開発や施設の改築等にともない、逐次発掘調査が行われている。






「安政元年浜松城絵図」

家康の散歩道

資料編

徳川家康（三方ヶ原戦役画像）徳川美術館所蔵
（三方ヶ原戦役画像）は、家康が三方ヶ原の合戦で武田信玄に敗れ、浜松城に逃げ帰った直後に描かれたものです。
唇をへの字に曲げ、目はくぼみ、目玉はギョロッとして焦点が定まらない、悲憤感ただよう表情のこの画を家康は生涯大切にし、「敗北」を自戒したといいます。

① 二代将軍徳川秀忠公誕生の井戸

家康には数多くの側室がいたが、もっとも知られているのが西郷の局である。彼女は掛川在の地侍戸塚五郎太夫忠春の娘である。母親は三河国西郷（豊橋市）における土豪西郷正勝の娘であった。浜松城に奉公に出て家康の目に止まり、天正七年（一五七九）、後に二代将軍となる秀忠を生み、翌年忠吉をもうけている。西郷局が秀忠を生んだ場所については二説あり、一カ所は浜松城二の丸。もう一カ所は現在の遠州病院北側の常盤町地内。いまそこには石碑が建てられ、井戸があった位置を示すように、地面に石で井の字が組まれている。常盤町地内の新川には、かつて誕生橋と呼ばれた橋があり、その橋の西側一帯を誕生屋敷と呼んでいたという。

③ 東照宮（引間古城址）

東照宮は、明治十九年旧幕臣井上延陵の発起によって創建された。御影石づくりの社号碑から北にのびる参道を百メートルほど行くと石の鳥居があり、その横に「曳馬城跡」（引間城址）と刻まれた史跡碑がある。鳥居をくぐり、石のきざはしを登った正面に拝殿、その背後に本殿がある。社殿の扉や屋根には三つ葉葵の紋所が見られ、徳川家康を祭神としているお社であることを表している。引間城はいつ頃、誰によって構築されたかは不明であるが、室町時代に吉良氏の家来によって築かれたという記録がある。永録十一年（一五六八）三河から遠江に入った家康は今川方の拠点であった引間城を攻め入城。その後、城地を拡大して浜松城を構築したのであった。引間城の跡には米蔵十数棟が建てられた。

④ 浜松城

徳川家康が初めて浜松の地を踏んだとき入城したのは引間城であった。遠江の経路拠点としては城が狭かったため、新城の建設を計画、引間城の西南の丘陵地を利用した大規模な築城を行った。それが浜松城である。家康が入城したのは元亀元年（一五七〇）といわれ、三方ヶ原の合戦が展開されたのがそれから三年後のことであった。現在残っている遺構は天守曲輪を中心とする一帯で、荒く組まれた「野面積み」の石垣が、往時の面影を伝えている。現在の天守閣は、昭和三十三年に建てられた。

⑤ 家康公鎧掛松

元亀三年（一五七二）家康は三方ヶ原の合戦から城に帰り、大きな松の木陰で休んだ。そのとき鎧を脱いでその松に掛けたことから、鎧掛松と呼ばれている。浜松市役所別館前にある松は、昭和五十六年に植樹された三代目。また、当時鎧掛松近くの清水で、合戦で疲れた馬のからだを冷やしたところは、馬冷と言って、その地名が今も松城町内に残っている。

浜松城と城下の変遷

浜松城には、前身の引馬城から起算すれば、四百年以上の歴史があります。けれども、出土品で見る限り、現在の浜松城の外観には豊臣秀吉の家臣、堀尾吉晴の影響が大であるといわねばなりません。また、江戸時代以降の大名による改修や城下町の整備も断片的ながら記録にありますので、江戸時代の絵図に見える浜松城・現在に残る浜松城は、いわば城の歴史のうち後半の二百年余に改変された姿ということになります。

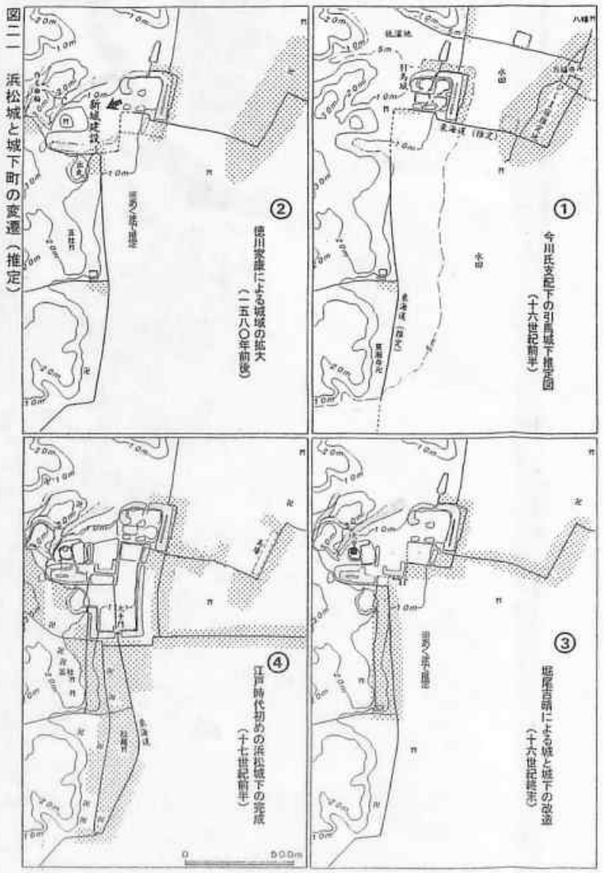
しかし、本書では、出土した資料をもとに、浜松城の重大な画期をとらえ、浜松城と城下の変遷を想定してみることにいたしました。根拠は現在なお希薄で、推定をするところもありますが、あえて呈示してご批判を待ちたいと考えます（図二一）。

今川氏支配下では、現在の市街地北東部に引馬宿があって、栄えていました。引馬城は江戸時代以来の推定のとおり、後の古城の位置に存在したものと思われます。三方原台地端の丘陵と谷を利用し、北側には低湿地が広がって天然の要害となっていました。この時代の東海道は馬込川（当時は天竜川の本流の一つ）岸から引馬宿を経由して西進し、引馬城の大手付近を通過してから南に曲がっていたものと推定します。飯尾氏や家臣の屋敷は城と宿の周辺に点在したものと思われます。

家康が入城すると、戦国大名の拠点として、城の拡張を始めます。在城時に西は作左曲輪まで完成していたことは、出土品からも推定されます。ただし、南部の城の範囲ははっきりしません。城下については、引馬宿の資産をそのまま受け継いだものと思われます。

家康が関東へ移封となると、浜松城の歴史の中で唯一豊臣系の大名が支配する時代を迎えます。この時、全国の他の豊臣系城郭と同様、瓦葺き建物や石垣など大きな変革が浜松城にもおとずれました。天守閣の有無については、論争もありますが、山内氏の掛川城同様、建設されたと見るのがよろしいかと考えます。後に堀尾氏は松江城を築いています。浜松城の整備は堀尾氏の意図によるだけではなく、背後には秀吉という人物がいて、東海の諸城について共通する方針があって、同時に変革させているのです。この時期には、城下町の整備もすすめられたものと予想されます。

堀尾氏入城の十年後、関ヶ原で勝利した家康は、いよいよ天下人として全国を掌握します。浜松を含む東海の城には、譜代の有力大名が交替で配置されました。豊臣色を残す天守閣は廃棄されたかもしれません。しかし、江戸前期までに浜松城内において、大規模に瓦が改修された痕跡は見いだされていません。三の丸も造成されましたが、ほとんど石垣は見られません。新東海道が建設され、引馬宿は廃止されて浜松城下が完成します。



図二一　浜松城と城下町の変遷（推定）

城主の系譜

徳川家康のルーツとその家族

三河の松平郷に発祥した松平氏。家康の祖父清康はその一族安城松平家の出だ。祖父の岡崎進出以後、岡崎・浜松・駿府を舞台に徳川一族のドラマが展開する。

〈凡例〉
■は岡崎城主であった人物。
■は今川館主・駿府城主であった人物。

今川義元 1519〜60
駿府の今川館を本拠に、駿河・遠江・三河を支配。尾張に出陣中、織田信長に急襲され、桶狭間で討ち死にした。（22ページ参照）

松平清康 1511〜35
三河安城城主。1524年（大永4）岡崎に進出し、のち岡崎城に本拠を移す。三河を平定して戦国大名となるが、誤解により家臣に斬殺された（守山崩れ）。享年25。

華陽院 ?〜1560
於富の方。絶世の美女といわれた。水野忠政の正室であったが離縁し、のちに清康と再婚したという。晩年は、駿府で人質時代の家康の養育にあたった。

水野忠政 1493〜1543
三河刈谷・小河（緒川）城主。家康の外祖父。水野家惣領。小河家4代目で、織田と争う松平家を支援。戦国の世で、生涯だれの臣下にも属さなかった。

松平広忠 1526〜49
清康の子。守山崩れで父が殺害されたため、10歳で家督を継ぐ。織田信秀の攻撃と松平家の内紛により、一時岡崎から追われ家臣と放浪したが、今川義元の援助で復帰。その属将となった。対織田戦の援軍を求めるため、長男家康を今川の人質に出す。岡崎城内で家臣の岩松八弥に刺殺された。享年24。

於大の方 1528〜1602
忠政の娘。家康の生母。松平広忠と結婚。岡崎城内で家康を生むが、実家を継いだ兄水野信元が織田方について別する。のちに尾張岡崎城主久松俊勝と再婚し3男4女を生む。号は伝通院。

松平清康画像
愛知県・隨念寺蔵
写真／三河武士のやかた家康館

築山殿 1542〜79
今川義元の姪。瀬名姫。義元の養女となり、1557年（弘治3）に家康と結婚。武田方に内通したとの疑いで殺害される。（22ページ参照）

朝日姫 1543〜90
豊臣秀吉の異父妹。佐治日向守（異説あり）と結婚したが、小牧・長久手合戦後の1586年（天正14）、秀吉の命で離縁し、家康の正室となる。名は旭姫とも。号は南明院。

徳川家康 1542〜1616
広忠長男。幼名竹千代。初名元信・元康。今川義元の没後、独立して織田信長と同盟。征夷大将軍となり、江戸幕府を開く。（20ページ参照）

松平信康 1559〜79
家康長男。岡崎城主。1579年（天正7）、織田信長に武田氏への内通の疑いをかけられ、家康の命で切腹させられた。（22ページ参照）

朝日姫画像　京都府・南明院蔵
写真／三河武士のやかた家康館

於愛の方 1562〜89
西郷局。家康の侍女であったが側室となり、浜松城で家康三男秀忠と清洲城主となった四男忠吉を生む。28歳で病死。号は宝台院。

於万の方 1580〜1653
薩山殿。小田原城落城後、家康に召され、伏見城で家康十男頼宣、十一男頼房（水戸徳川家初代）を生む。熱烈な日蓮宗信者であった。号は震珠院。

秀忠 1579〜1632
家康三男。長兄信康が自刃、次兄秀康が豊臣秀吉の養子となったため、江戸幕府第2代将軍を継ぐ。

家光 1604〜51
秀忠次男。江戸幕府第3代将軍。幕府権力の機能を整備し、大名支配体制を確立。

頼宣 1602〜71
家康十男。8歳で駿河・遠江・三河に50万石を与えられ、大御所となった家康と駿府城に同居。家康没後に駿府城主。のちに紀伊徳川家初代藩主となる。

忠長 1606〜34
秀忠三男。駿府城主で、駿河大納言とよばれた。父母には兄家光よりも愛された。家光の将軍就任後、その命で自害させられる。

徳川忠長画像
群馬県・大信寺蔵
写真／佐藤英世

築山殿

1542〜79

駿河　家康正室　享年38

瀬名姫、駿河御前。母は今川義元の妹、父は今川氏重臣の関口義広。

駿府の今川館へ人質として来ていた松平元信（家康）と、1557年（弘治3）に結婚。長男信康と長女亀姫を生む。

義元が桶狭間で戦死すると、信康とともに岡崎城に入る。城の築山曲輪に館があったので、築山殿という。

信康の妻に織田信長の娘徳姫を迎えるが、嫁と姑は不仲だった。1579年（天正7）、徳姫は姑と夫を訴える手紙を出し「築山殿が武田氏に内通した」と父に通報した。信長は、家康に彼女と信康の処分を迫る。

築山殿は浜松城へ呼びだされ、途中、佐鳴湖畔の富塚（浜松市）で、家康の命を受けた家臣に殺害された。廟所が浜松市の西来院にある。

築山殿画像　静岡県・西来院蔵

浜松まつりの不思議な暗合

□「浜松城記」の説く浜松まつりの起源

浜松の凧揚げ合戦を中心にした「浜松まつり」。この凧揚げ合戦、一説には永禄年間（一五五八〜七〇）のおこりという。これは織田信長の桶狭間の戦いのころで、今から四三〇〜四四〇年ほどさかのぼる。この説は元文四年（一七三九）に著された「浜松城記」に基づいており、永禄当時の引馬城（浜松城の前身）主・飯尾豊前守に嫡男・義広が生まれた祝いのため、付近の住人佐橋甚五郎が凧に「御名義広」と書いて揚げたのが始まりという。

□「浜松城記」のミステリー

ただこの「浜松城記」は信憑性に疑問が提起されていて、信用しづらいのだが、話としては実に興味深い。「佐橋甚五郎」なる人物は「寛政重修諸家譜」（江戸幕府の大名・旗本系譜集）にも出てくるれっきとした徳川家臣で、佐橋吉実と某の父子計三人が「甚五郎」と名乗っている。父は三河一向一揆で徳川家康に背いて討死し、息子は家康の嫡男・信康の小姓で、のちに逐電した。浜松にはゆかりのない人物なのだが、「浜松城記」では浜松の入野村の人間とされている。実はこの入野村、家康の正室・築山殿が家康の命によって殺された場所なのだ。

なお、「飯尾豊前守」は、乗遠・連竜父子のどちらかだが、子の連竜は家康に通じて主君の今川氏に殺された。

凧揚げの起源の話は、主役、脇役、場所の三つがすべて徳川家康に直接・間接の恨みを持つ要素で構成されるところに、奇妙な暗喩が感じられる。甚五郎、この話ではのちに朝鮮に渡り、帰国して凧を見て笑った、というが、この史料が偽作とすれば、作者はどんな意味をその笑いに込めたのだろうか。

（文＝橋場日月）

作画＝板垣真誠

天守曲輪東面（明治期）
『遠州浜松城跡』より（浜松市立中央図書館蔵）◉中央が天守曲輪表門の天守門。もとは櫓門であったが、安政の大地震で破損し、一階建ての平門となっている。この門も現存しない。

天守曲輪の石垣◉天守曲輪を囲む堤防状の石垣で、江戸時代には上に土塀が掛けられていた。横矢掛り（側面射撃）のために複雑に屈曲する。

城の構成

残る戦国の城の面影

浜松城は徳川家康が元亀元年（一五七〇）に創築した、戦国最末期の城であって、家康が居城として築いた初めての城といってもよい。

比高二五mの台地の先端を利用した平山城で、周囲の平地を含めて、ほぼ五〇〇m四方を城地としていた。その最高所である北西部に天守曲輪を置き、その東に一段下がって本丸、さらに一段下がって二の丸を一直線に並べ、二の丸の南から東を囲んで広大な三の丸と侍屋敷があった。また天守曲輪の南から西にかけては、空堀を挟んで清水曲輪と西端城曲輪を設けて守り、天守曲輪と本丸の北方は、深くて険しい谷が続いて、天然の要害となっていた。

天守曲輪は、家康時代の本丸と考えられ、他の近世城郭の本丸と比べて狭く、八五〇坪（約二八〇〇㎡）しかない。その形状は不整形で、大ざっぱに見れば、不等辺八角形をなしており、もともとの天然の地形に近く、極めて古めかしい。天守曲輪は、土居（土の斜面のことで、土塁や崖の総称）の上部に堤防状の石垣を築いて、四周を囲み、その中に巨大な天守台を築く。

本丸や清水曲輪なども、極めて不整形で、石垣は少なく、大部分が土居でできていた。そうした不整形な曲輪や土居を主とした城壁に、戦国末期の実戦的な城の面影がある。

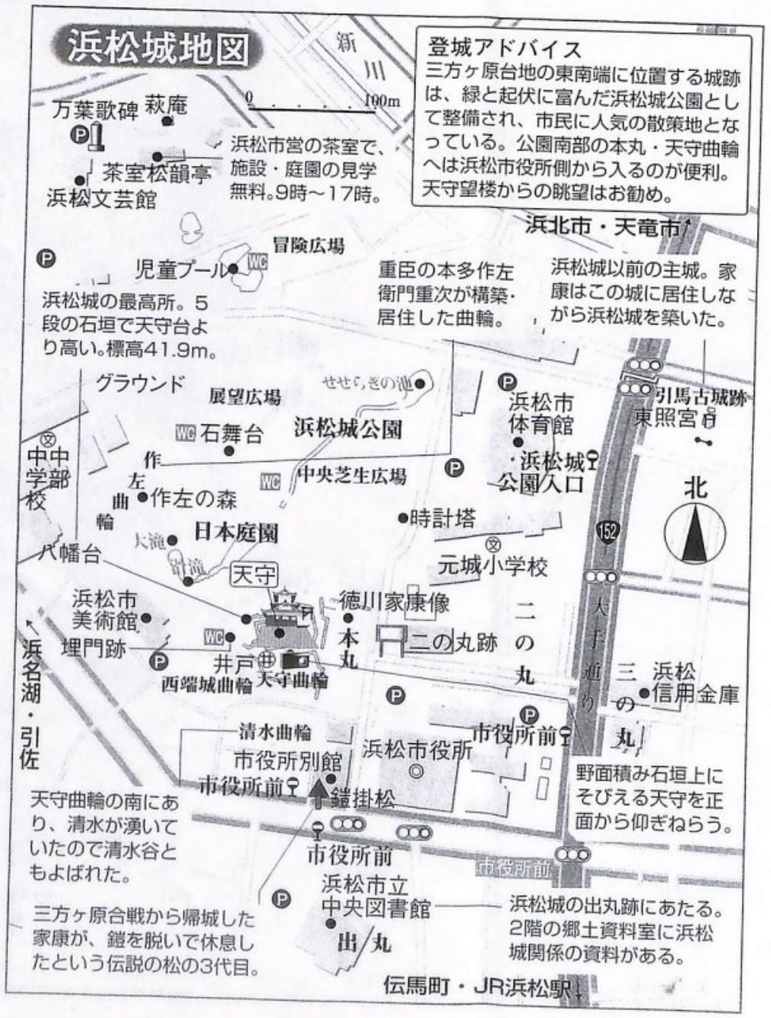
幻の天守とわずかな櫓

現在では、巨大な天守台の東半分だけを使って模擬天守が建つが、かつての天守に関する記録はまったくない。少なくとも江戸時代になってからは、天守台だけで、天守は失われていた。

浜松城の天守台は大きく、したがって、そこに建っていた天守は、現在の模擬天守の二～三倍の容積を占めていたはずである。外観三重で、内部は地上四階、地下一階が想定され、模擬天守よりはるかに威風堂々としていたことであろう。

浜松城は江戸時代には譜代大名の城とされたため、櫓の数が少なかった。二重櫓三基、平櫓一基、多聞櫓一棟しかなく、そのうちの本丸南東隅の菱櫓（二重）を天守の代用とした。

（文・写真＝三浦正幸）



天守台の登り口石垣◉俗に小天守台と呼ばれるもので、天守台の正面に付属し、ここから天守台に登る。往時はこの上に付櫓があったものと考えられる。写真は近年の積み直し以前のもの。

徳川家康「三方原戦役像」（徳川美術館蔵）◉家康（1542～1616）は、元亀3年（1572）に三方原で武田信玄と戦い、生涯唯一の大敗を喫した。その経験を忘れないように、負けてやつれた姿を描かせ、おごる心のいましめとしたと伝えられる。

近世の城主

□浜松城
堀尾吉晴―忠氏―松平（桜井）忠頼―水野重仲―高力忠房―松平（大給）乗壽―太田資宗―資次―青山宗俊―忠雄―忠重―本庄資俊―資訓―松平（大河内）信祝―信復―本庄資訓―資昌―井上正経―正定―正甫―水野忠邦―忠精―井上正春―正直

天守台の八幡台◉天守台の北西部の出っ張りで、天守台本体より一段高く築かれている。往時は天守の付櫓の台座石垣であったと考えられる。

城の歴史

家康の出世城となる

浜松城は、三方原の台地が海岸の平野部へ突き出した先端に位置する。この辺りには、引馬城という中世の小城があったが、後の浜松城の北東隅に包含されて、その来歴が置かれた。

浜松城を創築したのは徳川家康である。永禄十二年（一五六九）、遠江（静岡県の西部）をほぼ平定した家康は、翌元亀元年（一五七〇）に、その中央に浜松城を創築した。それまでの家康の居城であった三河の岡崎城（愛知県岡崎市）を長男の信康に与え、浜松を本拠として新領国の経営を行い、また織田信長に従って各地に転戦した。

浜松の築城から間もない元亀二年（一五七一）には、強敵の武田信玄が家康の領国へ侵攻し、浜松城はその防衛の本拠として活用された。翌三年には、家康の存在を無視するかのように浜松城の北を通り過ぎようとした信玄の大軍に対して、果敢にも三方原で合戦に及んだが、完敗して浜松城へ、ほうほうの体で逃げ帰った話は余りにも有名である。

元亀の創築以来、家康は浜松城の改修強化を怠らず、天正六年（一五七八）・天正七年・天正九年などに城普請を行ったという。そのころに浜松城の天守が創建された可能性は高い。天正十四年（一五八六）になると、東方への領国拡大に対応するため、居城を駿河（静岡県中部）の駿府城に移し、さらに天正十八年（一五九〇）には、豊臣秀吉の命によって関東へ移封されて、居城を江戸城とした。

領国拡大につれて居城を新領国へ次々に移していったのは織田信長で、家康もそれに倣ったといえる。浜松城の築城は家康の領国拡大の大きな第一歩であり、いわば家康の出世城であった。

転勤族の城となる

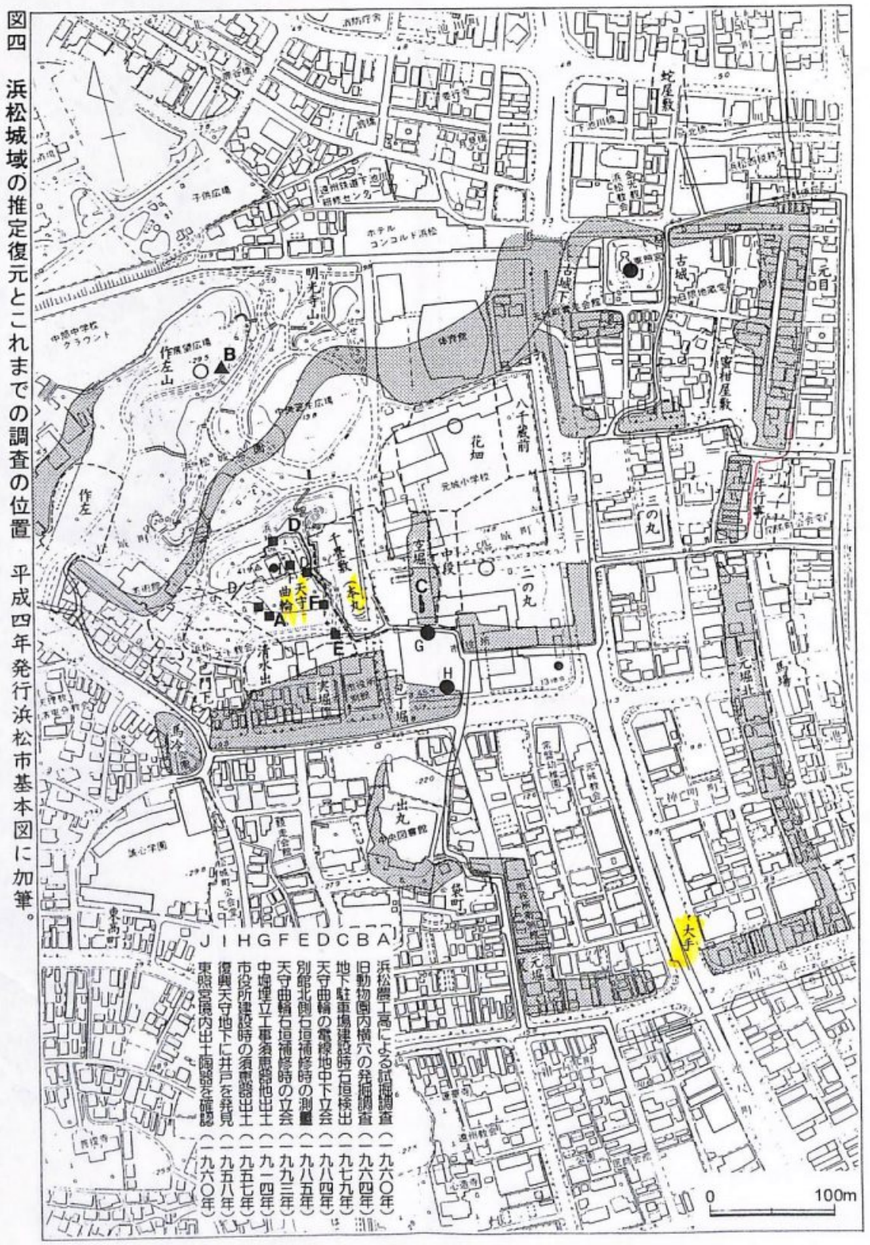
家康の関東移封後は、秀吉の傘下の堀尾吉晴が浜松城主となったが、それも東の間、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦後処理で浜松城は再び徳川氏に帰属し、それ以後は、徳川譜代の大名の居城となった。譜代大名はいわば転勤族で、浜松城主は目まぐるしく交代した。浜松城主から老中などの幕府要職となる大名が続出し、家康の出世城ならぬ譜代大名の出世城となった。

転勤族の城となったため、江戸時代初期までに失われた天守は再建されることがなかったが、地震や大風による災害復旧は、こまめに行われた。とくに安政元年（一八五四）の大地震の被害は大きく、天守台をはじめ各所の石垣や櫓が崩れ、大掛りな修復がなされたらしい。

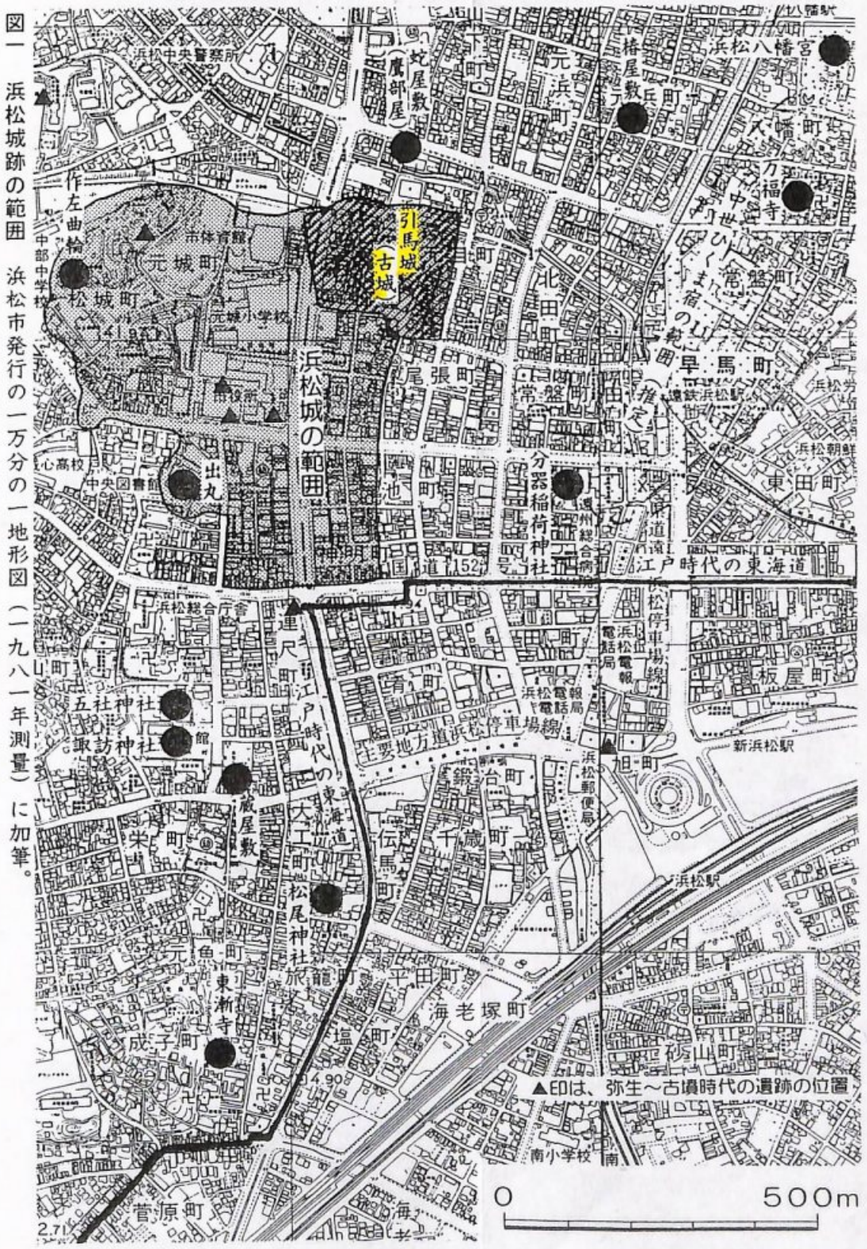
明治の廃城で建物は総て取り壊され、現在では天守曲輪および本丸の一部の石垣が残るのみである。

（文・写真＝三浦正幸）

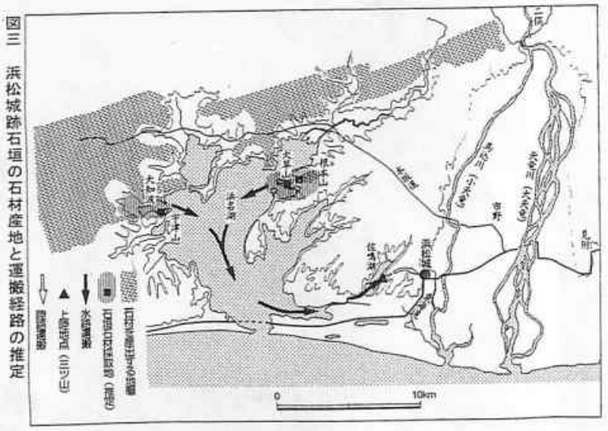
天守曲輪に残る井戸（写真＝加藤理文）◉城にとって重要な井戸が、浜松城には10か所ほどあった。天守台の地下にも井戸があり、模擬天守を建てる時にも残されたが、今は涸れている。



図四　浜松城域の推定復元とこれまでの調査の位置　平成四年発行浜松市基本図に加筆。



図一　浜松城跡の範囲　浜松市発行の一万分の一地形図（一九八一年測量）に加筆。



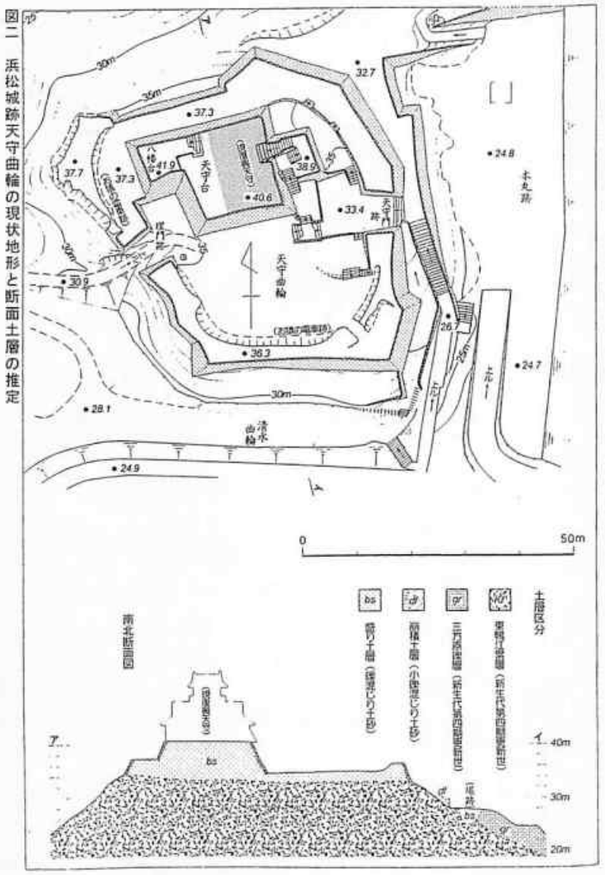
図三　浜松城跡石垣の石材産地と運搬経路の推定

天守曲輪は、掛川城・和歌山城などにも築かれていますが、類例は多くありません。ちなみに、掛川城は豊臣秀吉家臣の山内一豊の建設です。和歌山城は秀吉の弟・秀長の建設で、徳川時代の増築と手法が異なります。

浜松城で全周に石垣がめぐるのは、天守曲輪と本丸だけです。天守曲輪に残る石垣も、斜面上半部だけに見られます。いわゆる「鉢巻き石垣」です。浜松城は、全体的には石垣の少ない城であることも特色といえます。

天守曲輪は、三方原台地の標準的な海抜よりも高く、鴨江や高町にも見られる三方原よりも古い時代の堆積物・東鴨江累層にあたると考えられます。浜松城は、ここに盛り土したほか、台地に入り組んだ小さな谷地形なども有効に利用して、縄張りをしていたようです。

浜松城の石垣の石材は、チャート（珪岩）がほとんどで、浜名湖北岸には広く認められる岩石です（図三）。このため、浜名湖の水運を利用し、湖岸に露出した大草山や対岸の宇津山付近から切り出し、佐鳴湖東岸で陸揚げして浜松城まで運搬したと想像されています。佐鳴湖東岸の「三ツ山」には、かつて浜松城に運ばれる石との伝承を持つチャートが露出していました。ただし、城の石垣には、少量ながら大草山付近には認められない燻緑凝灰岩なども見られます。したがって、細江や三ケ日を含む奥浜名湖のどこかか、二俣付近の天竜川支流も、石材調達地の候[illegible]して想定しておく必要があります。



図二　浜松城跡天守曲輪の現状地形と断面土層の推定

工事立会調査の記録

浜松城跡のうち、本丸や天守曲輪では、市役所などの建設・改築や、浜松城公園の整備事業のための工事が実施されると、工事に立ち会って一部の石垣の調査などが実施されています。いずれも部分的なもので、浜松城の全体像を明らかにするまでにはいたっていませんが、この機会にそれらの概要をご紹介いたします。

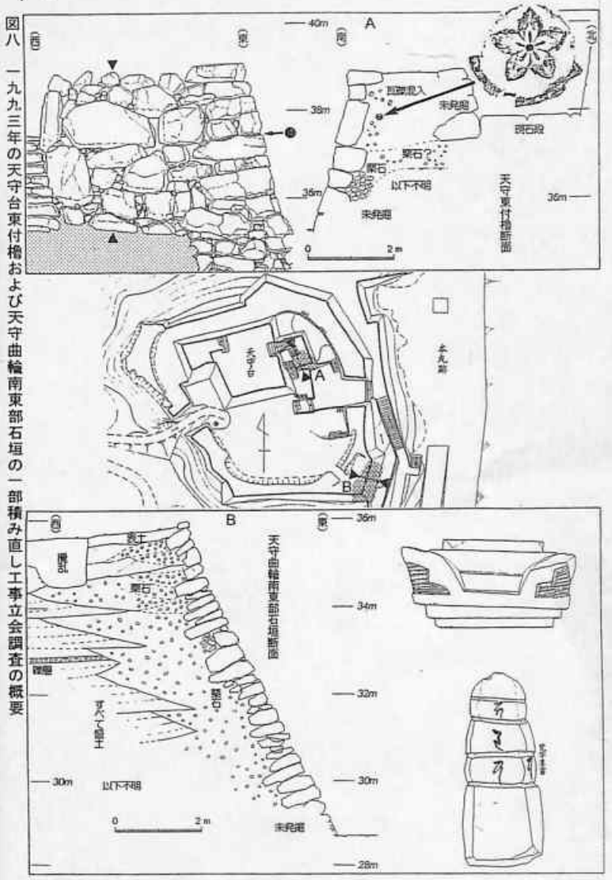
図八は、一九九三年に実施された、天守曲輪南東部の石垣と天守台東付櫓の一部石垣の積み直し工事立会調査の成果です。この事業は、石垣の老朽化がすすみ、崩落などの危険も指摘されたため実施されました。工事は、伝統的な技術集団である滋賀県穴太（あのお）衆の系譜をひく業者によりました。また、それにさきだって、石垣の現況の測量も実施しましたが、この成果については後日別の機会をもちたいと思います。

上の図は、東付櫓の成果を示します。位置図のAにあたります。東付櫓は、現在天守台に続く唯一の石段が設置されています。石段は櫓の範囲内で三回に折れて天守台に至ります。巻頭写真にも現在と同様の形状で絵図に描かれています。すなわち、青山氏が城主のころ（元禄のころ）までには今の形に作られているのです。

一九九三年の調査ではこの部分の石垣を一旦取り外しました。その結果、上半部の石は広い面を選んで石垣正面に向けているため奥行きが無いことがわかりました。さらに、通常石垣の裏側に詰められる栗石（裏込め石）がまったく見られず、かわりに瓦の破片などがたくさん見つかりました。しかし、さらに下半部に掘り進むと、石の奥行きも安定し、拳大の川原石の裏込めもきちんとほどこされていることがわかりました。つまり、付櫓のうち、上半部は後世に積み直しされていたのです。図に示した●印より上の石がそれにあたります。当初の付櫓は天守台よりも一段低かったのではないでしょうか。

また、下図Bのように、天守曲輪南東部の石垣も調査されました。浜松城内ではもっとも高く積まれた石垣です。ここの石垣は正面から見るとやや小ぶりの石が多いように見えました。けれども、実際にはどの石も奥行きが正面小口の三倍から四倍も長く、正式な石垣の積み方がなされています。栗石も幅広く詰められています。なお、調査した範囲まではすべて盛り土で、地山は検出されませんでした。したがって、天守曲輪石垣部分のほとんどが盛り土であると現在のところ予測されます。

上面の一部（水銀灯の設置など）を除いて後世の改変も認められず、建設当初の姿を伝えているものと見てよいでしょう。この石垣上部の裏込めから、一石五輪塔と宝篋印塔の破片が出土しました。いずれも戦国時代から江戸時代初期に流行した石塔です。これらは、石垣の建設にあたって転用されたものです。



図八　一九九三年の天守台東付櫓および天守曲輪南東部石垣の一部積み直し工事立会調査の概要

写真四　現存する天守台石垣と東付櫓の石垣（部分）
一九六〇（昭和三五）年一月に撮影されたものです。石垣角の算木積みのようすがよくわかります。

写真三　清水曲輪境にあたる石垣（一九八五年の調査）

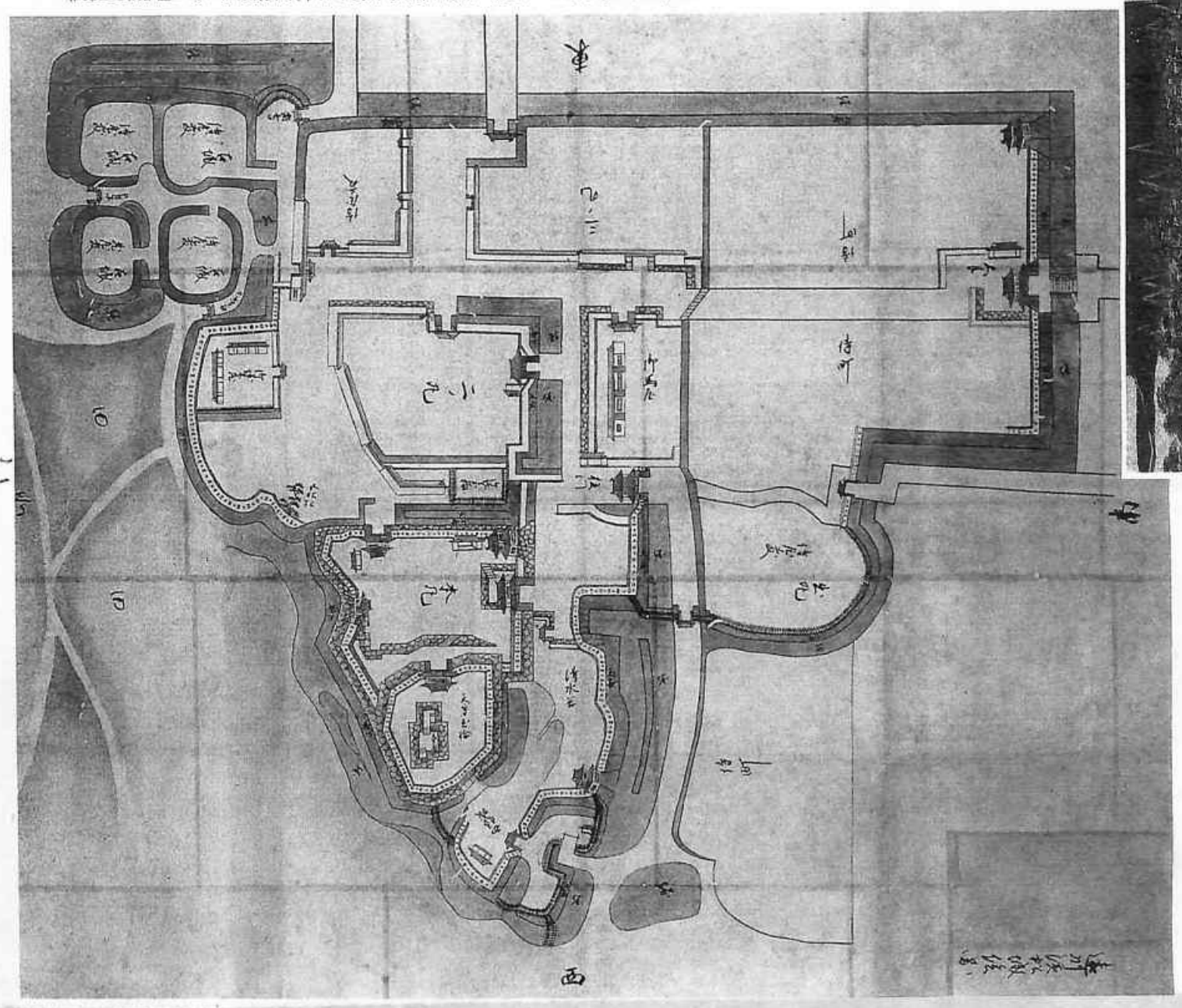
写真五　天守台と東付櫓石垣の全景
一九六〇年一月撮影。天守閣復興前後に植樹された樹木がまだあまり大きくないので、観察が容易です。

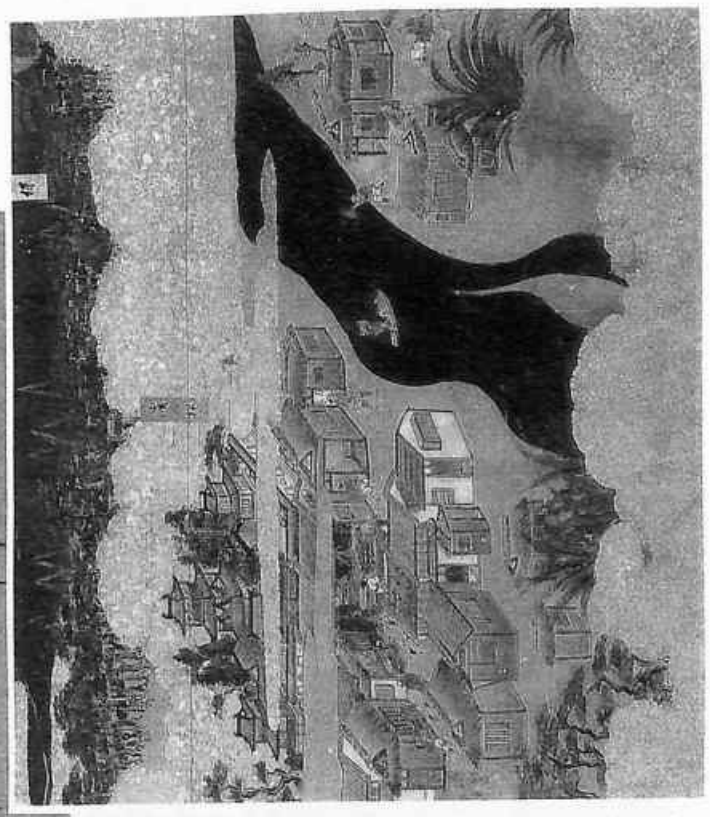
写真六　天守台西、八幡台
一九六〇年一月撮影。

写真七　天守曲輪全景
一九六〇年四月、北東から撮影。画面左端は、当時の市役所です。

遠州浜松城絵図　一六〇×九〇センチ　浜松市博物館

同様の縄張り図は多数残されている。出丸が「学屋敷」化しているが描かれていること、「玉造屋」が四つの郭として描かれていること、「玉造屋」が城内に描かれていることなどから考えると比較的古い時期（十七世紀後半から十八世紀前半）のものと思われる。浜松城は慶長八年以後の天正期に完成された。初期には天守閣もあったが延宝八（一六八〇）年の災害で破損。後はつくられなかったと考える。





浜松城　「東海道五十三次屏風」の内　静岡市教育委員会

高い位置（遠州灘）からみた俯瞰図。この手の絵に、五雲亭貞秀の「東海道五十三次之内浜松宿並曼荼寺風景」がある。浜松城のイメージは天守閣をもった城として描かれている。これが、本当だとすれば延宝8（1680）年以前の作か。天竜川と浜松宿を結びつけたモチーフの版画は意外と少ない。